AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2019.7) 平成30年度:4.

焦点化したカンファレンスにより治療のモチベーション維持可能となった急性動脈閉塞の一症例

山澤 健蔵, 中村 智美, 日野岡 蘭子

焦点化したカンファレンスにより治療のモチベーション維持可能となった急性動脈閉塞の一症例

旭川医科大学病院　9階東ナースステーション
○山澤健蔵　中村智美　日野岡蘭子[1)]
旭川医科大学病院　看護部[1)]

＜はじめに＞下肢急性動脈閉塞の患者に対し大切断も止む無しとされたが、歩行で退院に至った症例を経験したため報告する。

＜症例＞70代男性。慢性心房細動に伴う塞栓により左下肢急性動脈閉塞。治療開始は発症から1週間後。直ちに血行再建術を施行され、術中減張切開が行われたが筋肉壊死と膿瘍が続発した。感染コントロールと63日間のNPWTで管理し入院から6週後に植皮、10週後にアキレス腱再建を経て14週後に装具及び杖歩行で退院した。

＜ケアの実際＞入院直後から大切断が検討された時期では、切断への不安を受け止めることを重視した。小切断にとどまり筋肉壊死の創傷管理の時期では、早期から退院後の生活を見据えた介入を行い、長期化する入院の中で気分転換も含めて自身で生活を構築するための関わりを行った。

＜結論＞本人の言動から問題点を見出し焦点化したカンファレンスを行ったことで、的確な意思決定と治療のモチベーション維持が可能となった。